

## レモニー・スニケットの世にも不幸せな物語

2005(平成17)年5月5日鑑賞(梅田ピカデリー)

★★★★



監督＝ブラッド・シルバーリング／出演＝エミリー・ブラウニング／リアム・エイケン／カラ・ホフマン、シェルビー・ホフマン／ジム・キャリー／ジュード・ロウ（レモニー・スニケットの声）／ティモシー・スポール／ビリー・コノリー／メリル・ストリープ／キャサリン・オハラ（アスマック・エース配給／2004年アメリカ映画／109分）

……今、『ハリー・ポッター』シリーズの向こうを張る児童（文学？）書が世界40言語に翻訳され、3000万部を売り上げて世界を席卷中！ それが全13巻、各巻13章（その不吉な数字に注目！）からなる『世にも不幸なできごと』シリーズ。主人公は14歳の長女、12歳の長男そして1歳未満の次女の3人で、物語はそのタイトルどおり……？ サンフランシスコ在住で35歳の新進作家レモニー・スニケットは、今日もパソコンに向かって、「これでもか、これでもか」と主人公たちに対する不幸のネタを構想中とか……？ しかしそれって、精神的によろしくないのでは……？ たまたま5月5日の子供の日に観たためか、観客は家族連れでいっぱいだったが、『ハリー・ポッター』シリーズを抜くシリーズとなるのはちょっと無理……？

### 『ハリー・ポッター』か『世にも不幸なできごと』か

映画『ハリー・ポッター』はJ.K.ローリング原作のファンタジー映画だが、その原作は世界48カ国で翻訳され、1億数千万部の売り上げを誇っているとのこと。ところが今、この『ハリー・ポッター』シリーズの向こうを張る児童（文学？）書が世界40言語に翻訳され、3000万部を売り上げて世界を席卷中とのこと。それが全13巻、各巻13章（その不吉な数字に注目！）からなる『世にも不幸なできごと』シリーズだ。

原作者はサンフランシスコ在住で35歳の新進作家レモニー・スニケット。なお、この名前はダニエル・ハンドラーという人物のペンネームであることが明らかに

なっている。彼は今日もパソコンに向かって、「これでもか、これでもか」と3人の主人公たちを不幸に陥れるためのネタを構想しているわけだが、それって精神的によろしくないのでは……？

## 主人公は3人の子供たち

この作品の主人公は14歳の長女ヴァイオレット（エミリー・ブラウニング）、12歳の長男クラウス（リアム・エイケン）、そして1歳未満の次女サニー（カラ・ホフマン、シェルビー・ホフマン）の3人。人気小説となるためには何よりも主人公のキャラクターが大切だが、この3人の子供たちはきわめて個性的。

まず長女は発明の天才で、長い髪が目に入らないようにリボンで結んでいる時は、何かの発明に熱中している証拠。次に長男は本の虫。読んだことはすべて暗記しているというからスゴイ。このようにこの2人は天才肌で、2人の知恵の出し方がこの映画の第1のテーマであり、みどころ。それに比べると次女は嘔むことが大好きでどんなものでも嘔みついたら離さないというケツタイなキャラの女の子だが、怪しいものや怪しい人物を見抜くことにかけては天性の才能が……。

こんな3姉弟妹がそろえば百人力……？ しかし物語はそのタイトルどおり、「不幸なできごと」のオンパレード……。

## ジム・キャリーの熱演に拍手！

この映画に終始悪役として登場するのは、ジム・キャリー演ずるオラフ伯爵。オラフ伯爵が人相を変え姿形を変え、そしてまた手を変え品を変えて登場し、孤児となった3姉弟妹の後見人となって悪事を働こうとするのがこの映画のもう1つのテーマ。

ジム・キャリーは最近公開された『エターナル・サンシャイン』（04年）で、過去の記憶を消してしまったケイト・ウィンスレット扮する彼女を追って、自分も記憶を消そうとしながらも実行できず、結局そのために次第に混乱していく若い男性を演じていい味を出していた。

さらに彼は『マジスティック』（01年）ではアカ狩り旋風が吹き荒れた1950年代のアメリカにおいて、合衆国憲法が保障する表現の自由を守って闘うすばら

しい役柄を感動的に演じていた（『シネマルーム2』147頁参照）が、もともと彼はコメディを得意とする役者。

最初に登場するオラフ伯爵の姿から想像すると、この役者はいい歳のオッサンかと一瞬錯覚するが、ジム・キャリーは1962年生まれだからまだ43歳。このお子様向け映画の陰の主役としてはホントに最適。

どんな芝居も器用にこなせる喜劇役者としての才能を目いっぱい発揮していることがよくわかる。その熱演に拍手だ。

## 不幸の始まりは火事！

原作者レモニー・スニケットは、最初の不幸を突然の火事による自宅の全焼、そしてこれによる両親の死亡と設定した。つまり、これによってボードレール3姉弟妹は突然孤児となったわけだ。もちろんストーリーを面白くするための前提として、両親は大金持ち。そこで展開される物語は、私も弁護士として日常的によく処理している、遺産管理と未成年者の後見人選任をテーマとする内容になる。遺産管理人は銀行家のミスター・ポー（ティモシー・スポール）。彼は真面目で実直な人間だが、あまり利口ではなさそう……？ そのため、いつもオラフ伯爵にやられてばかり……。

## 日本での後見人選びのお勉強

日本の民法では、未成年者の両親が死亡したため親権を行う者がなくなった時は、後見が開始すると定め（民法838条1項）、遺言で未成年後見人を指定した時（839条1項）の他は、親族その他の利害関係人の請求によって家庭裁判所が未成年後見人を選任する（840条）と定めている。

もちろん、選任された未成年後見人に不正な行為があったときはこれを解任することができる（846条）、家庭裁判所が必要があると認めるときは、未成年後見監督人を選任することができる（849条）など、未成年後見人のさまざまな監視システムが働いている。

このように孤児となった未成年者が保護されるよう、ましてや未成年者が後見人の食いモノにされることのないように、ガッチリと法的システムが構築されて

いるわけだ。

## しかしこの映画では……？

この映画はお子様向けだから、法的な問題をあまり厳密に解説する必要はないかもしれないが、それにしてもボードレール3姉弟妹の後見人選びのシステムは不透明……。結果的にオラフ伯爵が後見人になるのだが、なぜ彼が、どのような手続で、後見人となったのかは不明。これはどうも、遺産管理人のミスター・ポーが指定しているような感じ……。オラフ伯爵と子供たちとの親族関係も不明で、遠い遠い親戚というだけ。でもまあ、どうでもいいか、そんなことは……？

## 一大事件の発生！

とりあえずボードレール3姉弟妹のオラフ伯爵の屋敷での生活が始まった。しかしこれが最悪……。オラフ伯爵によってイジられる毎日のくり返しとなった。しかしオラフ伯爵が後見人としての正式な手続を完了した時、今までの不幸せな生活が決して最悪でなかったことに3姉弟妹は気付かざるをえなかった。さて、その一大事件とは……？

## 3姉弟妹の親戚は変な人ばかり……。？

オラフ伯爵の次にミスター・ポーが選んだ後見人はモンティおじさん（ビリー・コノリー）。彼はたくさんのヘビと一緒に暮らしているケツタイな学者だが、いろいろ話してみると、どうも悪い人ではなさそう。というより典型的な学者バカタイプ（？）ながらすごくいい人。これで一安心と考えていたら、そこにもステファノと名乗る怪しい男に変装したオラフ伯爵の魔手が……。その結果またも一大事件が発生。ヤレヤレ……。？

## ジョゼフィーンも変なおばさん

次に3姉弟妹が引き取られたのは、なぜか断崖絶壁に建てられた家に住んでいるジョゼフィーンおばさん（メルル・ストリープ）の家。家は危険そうだが、ジョゼフィーンおばさんも悪い人ではなさそうで一安心。ところがここにも、シャ

ム船長と名乗る片足が義足の怪しい男が……。

「この男はオラフ伯爵だ」と子供たちはすぐに見破ったが、やさしいシャム船長の言葉やそのもっともらしい演技にジョゼフィーヌお婆さんはイチコロ。さてその結果……？

## 物語の結末は？

そんなこんなの物語を次々と展開させていくのだから、原作が全13巻となるのも十分うなずける。しかし、映画としては2時間で完結させなければならないため、それなりの結末を用意している。さてその結末とは……？ それを言っちゃおしまいだから、それは映画を観てのお楽しみに……。さて、どんな不幸せが待っているのか、いろいろと想像たくましくしながら観ていこう。

## ホントにこれで婚姻が成立するの？

前述したように、オラフ伯爵は極悪非道の悪人だが、同時にかなりの知能犯。そのうえ芝居の研鑽を積んでおり、「オラフ伯爵劇団」を主催しているほどだから、その演技力（騙しのテクニック）も超一流。これではいくら知恵があるとはいっても、14歳のヴァイオレットと12歳のクラウスらはオラフ伯爵に振り回されるはずだ。

その騙しのテクニックの究極ともいべきものが、オラフ伯爵邸の向かいに住んでいたストラウス判事（キャサリン・オハラ）を巻き込んだ偽装結婚！

法律上の婚姻はおおむねこの国でも、当事者がサインをして役所に届け出ることによって成立するが、何でも神様の許可を必要とするキリスト教社会（？）を前提として、この映画すなわちレモニー・スニケットの原作においては、男女の婚姻成立のためには本物の判事の立ち会いのもとに結婚の誓いをするのが必要だし、逆にそれさえあれば十分という立場をとっている……？ そこでオラフ伯爵が考えた策略は、第1にヴァイオレットに対しては、「結婚を誓います」と言わなければサニーに対して危害が及ぶと恫喝し、ストラウス判事に対しては、舞台上で役者として演じてもらうのだからと騙すもの。

このオラフ伯爵の策略どおりコトは運び、婚姻の誓いへのサインが終わってし

まった以上、もはやオラフ伯爵とヴァイオレットとの間で法的に成立した婚姻は覆らないものに……？

映画では、このたくらみはクラウドのある知恵とある行動によって見事に粉碎されるが、弁護士の私としては、こんな詐欺や強迫による意思表示がまかりとおるという映画や原作はナンセンス。そのうえヴァイオレットはまだ14歳だから「婚姻適齢」の問題もあるはず（ちなみに日本の民法731条は男は18歳、女は16歳と定めている）。まあ、お子様向けのファンタジー映画だから、あまり目くじらをたてて文句を言うほどのことはないのかもしれないが……？

いやいや、「婚姻の成立要件」についての誤った情報が子供たちに伝えられるのは、「法化社会」が標榜され、中・高校生に対する「法教育」の重要性が強調されている昨今、やはりそれはまずい。

この映画における婚姻の法的成立要件についての「誤り」は、やはり弁護士の私が書く映画評論で正しておかなければ……。

### 字幕版か吹き替え版か？

「お子様向け映画」には、必ず字幕版と吹き替え版の両方が用意されている。またテレビの地上波で放送される映画では、お子様映画でなくても、WOWOWや衛星放送はともかく、どちらかという吹き替え版が主流。テレビでやる映画では、下手すると、放送時間の枠におさめるために元の映画を勝手に一部カットすることもあったほど……。

もちろん英語がわからないうえ、字幕もまともに読めない小さな子供向けに吹き替え版が有効なことは認めるが、一般の大人向けのテレビ番組の映画で吹き替え版を使うのは、「うとうとひと眠りしながら映画を楽しみましょう」と言っているようなもので、不見識極まりないもの……。

このように私の意見では、吹き替え版ははっきり言って邪道！ やはり外国の映画を味わうには、ナマの音声聞くことが大切で、それを直接理解できない人たち（私を含めて）を補助するテクニックとして字幕を活用すべきだと私は考えている。感動しながら何回も観た昔の名作映画を考えても、目に焼きついている感動的な場面はその多くがセリフを伴うもの。

たとえば、『誰がために鐘は鳴る』（43年）におけるイングリッド・バーグマン扮したマリアが言う「ねえ、キスしたいけど……どうすればいいの？ 鼻が邪魔にならないかしら？」というセリフ（英語でどういふのかは忘れた……）やハリウッド版『戦争と平和』（56年）でオードリー・ヘップバーン扮するナターシャが言う「ALL IS OVER」（もう私の恋は終わってしまった）のセリフがそうだ。

また、『ウエスト・サイド物語』（61年）や『サウンド・オブ・ミュージック』（65年）などのミュージカル映画の名作では、英語の原曲で歌ってもらわなければ何の意味もない！ だから私は断然「字幕派」だ！

### 今日は子供の日だった！

5月3、4、5日と連休が続いたが、この映画を観た今日5月5日が子供の日だったことを実は私はほとんど忘れていた。だって最近は祝日の意味するものが薄れてきたし、〇〇の日を祝って国旗を掲げる家などどこにもないのだから。多くの日本人が今日は祝日なのかそれとも振替休日なのかの区別も意識しなくなっているのが現状だろう。日曜日でないことは、いつも見ているテレビ番組でないからすぐにわかるのだが……。

私がこの映画を観たのがたまたま5月5日の子供の日だったため、観客は家族連れでほぼいっぱいだった。しかし、こんな快晴の日に家族揃って外出（遠出）せず、近場の映画館に入るのは、意地悪く言えば安上がりで子供サービスを済ませようという根性の悪い、ちょっと暗い家族かも……？ そう思わざるをえないようなマナーの悪い家族連れが約1組……。

しかし、子供の日はこの程度の客の入りでは、大人気となった『ハリー・ポッター』シリーズの人気を抜くのは到底無理……？

2005(平成17)年5月6日記